

表2-5 322CA(アミノ酢酸硫酸鉄)

奇形(メジャー)	数	奇形(メジャー)	数
内斜視	3	斜頸	3
そけいヘルニア	9	色素性母斑	1
二分脊椎	1	奇形(マイナー)	数
耳介奇形	1	巨大舌	1
口蓋裂	1	機能異常	数
多指症	1	精神発達遅滞	2
合指症	1	症候群	数
先天股脱	11	ダウン症候群	1
ロート胸	2		

表2-7 399IA(代謝性医薬品-グルタチオン)

奇形(メジャー)	数	奇形(メジャー)	数
血管腫	2	ロート胸	1
そけいヘルニア	5	斜頸	4
水頭症	1	色素性母斑	6
先天股脱	4		

表2-6 322CK(硫酸鉄)

奇形(メジャー)	数	奇形(メジャー)	数
血管腫	4	色素性母斑	2
内斜視	2	奇形(マイナー)	数
そけいヘルニア	19	副耳	1
横隔膜ヘルニア	1	指の変形	1
水頭症	1	機能異常	数
心室中隔欠損症	1	精神発達遅滞	1
心房中隔欠損症	1	難聴	1
口蓋裂	1	噴門弛緩症	1
停留臍丸	4	症候群	数
内反足	2	ダウン症候群	1
先天股脱	5		
ロート胸	4		
斜頸	22		

A-2. 消化器系の先天異常の母体条件と胎児側要因(その1)

北里研究所附属病院産婦人科

小林 英 郎

1. 発生頻度(表1)

表1に、当調査に報告された主な消化器系の先天異常の件数、頻度、文献で調べられた頻度を載せた。おおむね適当な頻度のようにあるが、この中で、口唇口蓋裂という頻度は探し得なかった。そこで、この件数を加えて頻度を出しなおしてみると、口唇裂は878例の出産に1件、口蓋裂は746例に1件となり、大体文献と合致する。この全対象児数は14,920件である。

2. 父・母の各種の状況

(1) 主として遺伝的状況

まず年齢分布では、特に高年齢化傾向はなく、血縁関係も対象群と変らなかった。

身長・体重は、父・母とも多少小さめであったが、明らかな違いとは言えない。

血液型では、父・母とも、A型が多くB型が少ない。時に父の場合、A型47.3%に対し、B型5.6%とアンバランスであった。

(2) その他の状況

初潮年齢に差はないが、月経痛が、対照群39.3%に対し、奇形群51.2%と多かった。これは奇形群に初産が多かった(56.3%)ためかもしれない。妊娠前1年間のレントゲン撮影では、奇形群がむしろ少なかった。

3. 妊娠中の母の生活状況

職業を持っていたものが奇形群に多く、幽門狭窄では7.5%であった。食事については、口唇裂と口蓋裂について文献上記載をみるが、当調査の蛋白スコアでは、口蓋裂で低スコアのもので2件みられた。飲酒・喫煙は、妊娠前、妊娠後、とも

に奇形群でわずかに多くみられた。特にこの傾向は、口唇裂、口蓋裂、幽門狭窄で顕著である。腹痛または性器出血の訴えは、奇形群で、中・後期に多かった。

4. 妊娠・分娩に関する医師の記載

(1) 産科的既往症

初・経産別では、奇形群では初産が56.3%、経産が43.8%である。この中で、幽門狭窄が第1子に多いという文献があるが、当調査でも初産6件に対し経産3件であった。

次に、経産側を調べてみると、過去に帝切及び吸引分娩が多く、過去の児では口蓋裂で3件の低体重児があったのと、臍帯ヘルニアの経産例が、過去にも奇形児を出産していた。

(2) 妊娠経過

妊娠中の体重増加は奇形群で少し少なく、特に口蓋裂群に著しい。また奇形群では、尿蛋白と浮腫の陽性率が比較的高い。晚期妊娠中毒症の診断を受けているものは、対照群9.0%に対し、奇形群は22.9%であった。

(3) レントゲン撮影

2回以上の撮影を受けたものは、対照群が6.9%に対し奇形群20.8%と多かった。2回のうち1回、腹部の撮影を受けたものは6件あり、8カ月2件、9カ月1件、10カ月3件であるが、このうちの3件は幽門狭窄例である。

(4) 産科手術

何らかの産科手術を受けたものは、対照群17.3%に対し、奇形群28.3%と高く、中でも帝王切開は、対照群5.0%に対し奇形群は10.9%であった。特に幽門狭窄例は、記載のあった8例中、2例は吸引、3例が帝王切開を受けている。

5. 新生児

(1) 分娩時妊娠週数と初体重

32~36週の早産がわずかに多いが、週数別分布としては、対照群と大きな差はない。しかし、妊娠週数に応じた、各期の平均初体重は、対照群に比し、32~36週で308g、37~41週で73g、42週以上では325g、それぞれ小さかった。

(2) 児の性別

当調査の全対象児で性別のはっきりしているものの14,905件での男女比は約109:100で、当

論文の対照群、つまり、単胎、生産、正常児11,504件の男女比は約106:100である。これに対し、奇形群の男女比は、約81:100で、明らかに男児が少ない。この原因の多くは口唇裂にあり、当調査の男女比は、実に42:100と女児が多い。女児より男児に多いとする文献と相反する結果であった。また、幽門狭窄は男児が女児の3~4倍多いと云われるが、当調査では125:100であった。

(3) 血液型

奇形群ではB型が11.8%と対照群の22.0%の約半分である。しかし、これは、前述した、父・母の血液型分布のアンバランスが原因で、特別の意味はないものと考えられる。

(4) 周産期死亡

生産したものにたざれば、第1呼吸までの時間や、Apgar Scoreには、対照群と差はみられない。しかし、児の死亡は、分娩前2、分娩中2、分娩後1、計5件あり、周産期死亡率になおすと分娩1,000件あたり104となる。

表1. 消化器系先天異常の頻度

	件数	頻度	文献にみられる頻度
口唇裂	9	1/1658	1/500~1000
口蓋裂	12	1/1243	1/800
口唇口蓋裂	8	1/1865	
幽門狭窄	9	1/1658	1/200~50,000
先天性胆道閉鎖	3	1/4973	1/8,000~34,000
臍帯ヘルニア	3	1/4973	1/3,200~6,600
横隔膜ヘルニア	4	1/3730	1/1,196~10,000
計	48	1/311	

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります 

A-2. 消化器系の先天異常の母体条件と胎児側要因(その1)